

続・南蛮の風紀行長崎篇 - 4 「近くて遠い故国への想い」

日本三大中華街と言えは横浜（横浜中華街）、神戸（南京町）、長崎（新地中華街）なのですが、「中華街」という言葉で連想するのは、やはり横浜や神戸です。しかし、実は長崎の新地中華街こそが、最も由緒ある中華街なのです。明治の開国以後に形成された横浜や神戸と違って、室町時代に形成され、江戸期を通じてオランダ商館街である「出島」と共に、司馬遼太郎の言う「鎖国という暗箱に開いた小さな穴」のひとつとして機能していたのです。

ただし、江戸初期の鎖国政策開始時に主に福建省から渡来した中

国人たちに与えられた「唐人屋敷」は現在の新地中華街ではありません。そこから少し山手に「唐人屋敷通り」を上ったあたりにあったようです。現在は「福建会館」という華僑の公民館のような機能を持つ建物と、そこに隣接する「唐人屋敷さるく展示室」があるあたり、そこからもう少し上った右側の「天后堂」のあたりだったようです。もちろん「阿蘭陀屋敷」である「出島」と同じように周囲は塀で囲まれて、出入りを厳しくチェックされていたし、日本人は通詞を除いて立ち入りを許されていませんでした。

もっとも、そこはやはり同じ東洋人の顔をしていますし、プロテスタントとはいえキリ

スト教徒であるオランダ人よりは、その行動は自由だったようです。「出島」が1634年に造られているのに対して、「唐人屋敷」は遅れること半世紀1688年に造られています。その収容人口は2000人程だったそうですが、もっとも中国人の多かった時には、人口7万人の長崎に、約1万人の中国人がいたというのですから不思議ではないですか。

それに西洋の新知識といっても、オランダ語を理解するには時間も忍耐も必要でしたが、漢語であれば白文の読める知識人であれば容易に読めますので、多くの分野の新知識が、まず中国本土で漢語



江戸時代に鎖国中の日本に開いていた、外国へのもう一つの窓「唐人屋敷」の様子です。今日では「出島」と同じように埋め立てて造った「新地中華街」に賑わいが移り、「唐人屋敷」跡は近代的な街並みに埋もれてしまいました。



長崎ランタンフェスティバルの主役である「媽祖様」は天后とも呼ばれ、華南地方の民間信仰（道教）のシンボルです。祭りの最終日に、長崎美人に抱かれて黄檗宗の崇福寺を出発し、街を練り歩きます。

に訳され、それが輸入されて来ていました。暗箱に空いた針孔としては、むしろ「唐人屋敷」の方が明るかったとも言えます。



媽祖様の行列が唐人屋敷跡近くの孔子廟に到着すると、いよいよランタンフェスティバルのフィナーレに向けて、最後の華やかさが繰り広げられます。

1698年に長崎で大火事があり、市内に点在していた交易品が燃えてしまい、大打撃を受けました。そこで「唐人屋敷」からほど近い入り江の浅瀬を石垣で囲い埋め立てて、対中国貿易専用の倉庫群を建てたのが、現在の「新地中華街」というわけです。

日本での華僑の歴史は13世紀まで遡ります。現在、華僑の活動範囲は東南アジアを中心に世界中に広がっていますが、それらの国々への進出は16世紀の大航海時代に始まっています。その3世紀の違いに日本との関係の深さ、濃さを感じます。博多などにも「唐人町」などという地名が残っているのもその歴史の名残でしょう。それにしても、16世紀後半の大航海時代盛んになりし頃から鎖国制度の始まるまでの約1世紀以上にわたって、さぞや長崎のまちには中国本土の香りがしていたことでしょう。

長崎ランタン・フェスティバルはもともとはその長崎在住の華僑のお正月を祝う「春節祭」です。それが1994年からは中華街だけではなく、街中いたるところに鮮やかな色に彩られたランタンが2万近くも飾られるようになりました。ランタンがその艶やかさを増すのはやはり夜ですね。夜の帳に浮かぶ極彩色のランタンや人形を見て歩いていると、とても日本にいるとは思えなくなります。16世紀の日本人も同じように、長崎の中国情緒に酔いしれていたことでしょう。

それにしても華僑はなぜ故国を捨てて海外進出したのでしょうか。倭寇が猖獗を極めた時代には、無理やり連れてこられた人や、一獲千金を夢見て「黄金の国ジパング」を見つけた人もいたことでしょうが、それにしても海外で活躍しながら、今でも中国人としてのアイデンティティーを堅持しながら海外に根を下ろしている人々の共通のモチベーションは何だったのか興味深いですね。

ひとつ面白いデータがあります。現在、日本には約69万人の中国人が住んでいます。その人々の出身地を見てみると、一番多いのが遼寧省の約11万人、次が黒竜江省の7万5千人で、中国北東部、所謂旧満州からの人々です。しかし、華僑と自他ともにそう呼ん



青森の「ネブタ」や大分の「戦紙」と同じようなつくりなのでしょうが、そこはやはりお国柄、異国情緒たっぷりの雰囲気醸しています。

ひとつ面白いデータがあります。現在、日本には約69万人の中国人が住んでいます。その人々の出身地を見てみると、一番多いのが遼寧省の約11万人、次が黒竜江省の7万5千人で、中国北東部、所謂旧満州からの人々です。しかし、華僑と自他ともにそう呼ん



新地中華街の中にある「華僑会館」は、中華街の商業組合の事務所と華僑のための公民館的な機能を持っているようです。

でいる人々の出身地は福建省を中心に全て華南（中国南部）に集中しています。元々、中国では民族や地域ごとに言語が微妙に違うため、海外でも共通の言語を通じての結びつきが強い傾向があります。日本では台湾という中継地の関係もあって福建省出身者が多く、先ほどの遼寧省・黒竜江省出身者に次いで第3位の6万人が暮らしています。現在、長崎県内にはその福建省出身者を中心に約4千人がいるそうです。少し少ないと思われるかもしれませんが、それはあくまで華僑の数であり、華人（日本国籍を取得した中国人やその子孫）は入っていないから

なのかもしれません。ちなみに在日コリアン（在日韓国・北朝鮮出身者）は現在約57万人です。

暗闇に鮮やかな色で輝くランタンにも、チャルメラやラッパ、銅鑼やシンバルの賑やかな音色にも、そこはかたない哀愁のようなものを感じるのわただけでしょうか。その哀愁は故郷を離れて暮らす人だけが抱くであろう、遠く故郷への思いだとわたしは化案が得ています。昔から東シナ海を挟んで一衣帯水と言われた長崎と中国本土の距離はますます近くなるばかりです。それでも、故郷を出て海外に暮らすようになった人々の歩んでこられた暮らしの歴史の重みは、はるか遠いものになっていることでしょう。「近くて遠い故郷」への思い、それが長崎の街に漂い出て、わたしたちを異次元の世界に引き込んでいるようです。



いくつかの会場に分かれている中でも、わたしはプログラムからこの会場で演じられる「エイサー」をフィナーレに選びました。沖縄の若者たちの特別出演ということで期待していましたが、正しく期待以上の盛り上がりでした。演じている若者たちの輝くような笑顔と、最後は「カチャーシー」になった舞台上に老若男女、大勢の観客が上がって、うれしそうに踊る姿は涙が出るほど感動的でした。長崎人でなくても、この祭りが「病みつき」になりそうな予感のする、祭りのフィナーレでした。